

日本人・非日本人の日本語使用に対する言語イデオロギーの比較

ーバラエティ番組における言語的逸脱の演出からー

楊留（筑波大学大学院）

1. はじめに

日本語使用について、多くの話者は日本人の話す日本語をスタンダードとし、非日本人の日本語をその下位に位置付けることが指摘されている（たとえば Nishizaka, 1995 など）。このような、言語や言語使用についての話者の信念は「言語イデオロギー」(Silverstein, 1979) と呼ばれ、我々のコミュニケーションにおける判断や行動に影響を及ぼすと考えられる。本研究は、バラエティ番組に登場する日本人と非日本人の出演者の言い間違いや言い淀みに着目し、それがどのように「面白い」ものとして提示されるかを分析的に記述することにより、日本人・非日本人話者に対する言語イデオロギーの違いを比較する。これにより現代日本社会の日常生活に潜む「言語ナショナリズム」(linguistic nationalism; McVeigh, 2004: 197) の解明を試みる。

2. 研究方法

2.1 データ

本研究では分析対象としてバラエティ番組『嵐にしやがれ』（日本テレビ、2010-2020）の2016年12月3日（第289回）から2020年4月11日（第428回）、計140回の放送を録画したものを扱う。当該番組は幅広い視聴者層を有しており、また、番組において言語使用をめぐる交渉や文字テロップ・効果音などを用いた編集技術が頻繁に観察される。これまで、マスメディアにおける日本人の言語観や非日本人への態度に焦点を当てた研究のほとんどは、『COOL JAPAN』（NHK、2006-今現在）のような、日本人・非日本人という対照するカテゴリーの対立が前提の番組を扱っている（たとえば Hambleton, 2001 など）。これに対し、本研究が取り上げた『嵐にしやがれ』という番組は、予め日本人・非日本人の対立のもとで構成されていない。つまり、番組を理解するのにあたって作用する、言語使用や話者に対する信念である言語イデオロギーは、番組の中で提示されるものではなく、日常的・反復的实践の中に潜む習慣として、視聴者や制作者によって共有されていることになる。

2.2 分析方法

分析方法として、コミュニケーションで見られる様々な言語的・非言語的資源を「モード」と見なし、テレビ番組などのマスメディアを複数のモードが組み合わせられたプロダクトとして捉えるマルチモダリティ分析 (Kress, Jewitt, Ogborn & Tsatsarelis, 2001) を採用する。具体的には、出演者や制作者がコミュニケーション上の支障だと感じたり違和感を覚えたりするようなものとしてメタ的に明示されるものを「言語的逸脱」としたうえで、そのもととなる発話や会話および編集の過程で加えられる効果音や文字テロップなどの演出を個々のモードとして分析を行う。

3. 分析

3.1 日本人出演者の場合①：訂正¹に関する交渉

事例1は嵐メンバーの松本潤（以下、松本）の担当コーナー『THIS IS MJ』からである。本コーナーでは松本が様々なことをいかに格好よくこなせるかに挑戦し、不定期に他の芸能人を招き、「スマート対決」を行う。コーナーの冒頭では、正装姿の松本とゲストがそれぞれ真っ黒な背景に照明と革張りソファだけが置かれたセットの中で、勝負に臨んでの抱負を述べるのが常例である。

[事例1]（破線は笑い・拍手の効果音と重なる部分を指す）

01. 山崎 やっと MJ を倒せる日が来たなっていう。
02. そのために、アクションバチバチにきたい°
 (てきた)° んで。
03. ((右を見てから、下を向いて笑う))
04. スタッフ 吉沢さんはん
05. 吉沢 >まくそうですね:。 >まくMJ を倒しておけば。
06. この業界ではひと(.)ん:。
07. .hh¥° あのちょっと° ¥
08. スタッフ 二人とも噛みすぎなんすけど hh



図1 02行目の文字テロップ

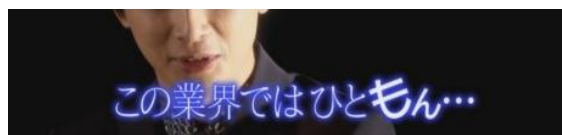


図2 06行目の文字テロップ

事例1では、俳優の山崎賢人と吉沢亮（以下、山崎、吉沢）との二人がゲストとして出演している。まず01と02行目で、山崎は松本に勝つために、アクションの練習をしてきたと述べた。しかし、02行目にある「きたえてきた」の「え」は「い」のように発音され、その影響か、続く音があいまいに発された。それを産出した山崎は下を向き、はにかむように笑う。その動きは、彼が直前の発話は問題がある、つまり言語的逸脱であるとの認識を示す。一方、それが放送されることで、02行目の発話は言語的逸脱だけでなく「面白いもの」として視聴者に提示される。それが逸脱であることは、テロップや効果音による演出により顕在化される。01行目からの山崎の発話につけられるテロップは、「バチバチにきたえてきたんで」の「いてきた」の部分が明朝体ではなく丸みを帯びたゴシック調のフォントになっており、文字の向きや大きさがバラバラに配置される（図1参照）。また、この発話が産出された直後に、笑い拍手の音声が響き、直前の発話を面白いものとして枠づける。

続いて、収録スタッフを思われる人物が「吉沢さんはん」²と発話し（04行目）、それに続く吉沢の発話は、吉沢にとってなぜ松本に勝つことが必要かの理由として理解することができる。しかし、吉沢は「ひと」を産出してすぐに話を止め、続いて「ん:。」の音を発し、発話を終わらせないまま中断する（06行目）。そして、小声で笑いを噛み殺すように「あのちょっと」と発話する（07行目）。この発話は、声のトーンや大きさ、そして口語的表現の使用から、番組視聴者に向けてのものではなく、収録現場にいたスタッフへのものとして発せられたと捉えられる。つまり07行目において、吉沢は自分の06行目の発話を放送に不適切なものだと判断し、それを中断してからスタッフに対して、謝罪なり撮り直しの要請なり、何かしら働きかけをする。この発話も山崎の時と同じく、言い間違いを強調するようにテロップ化され（図2参照）、「ん:。」の後に笑い声の効果音を

¹ 本研究における訂正とは、言い直したり、言おうとしていたことをジェスチャーで示したりなど、逸脱を産出した本人による正しい言い方の提示という行為である。

² この発話がスタッフによるものであることは、発話と同時に現れる「スタッフ」の文字がともなう「吉沢さんは？」のテロップから推測できる。

入れられ、笑えるものとして提示される。同時に、画面外のスタッフが笑いながら「二人とも噛みすぎなんすけど hh」と発話するが、この発話もまた、「このテイクはもうだめだ」というメタメッセージが含まれており、取り直し（訂正）を示唆する。つまり、事例 1 において出演者が産出した言語的逸脱に対し、出演者・制作者両方による訂正の交渉が行われた。また、本来ならば取り直しが必要だったこの断片が放送されたことから、編集によって逸脱は放送してもいいもの・面白いものとして仕立てられたことがわかる。

3.2 日本人出演者の場合②：逸脱の予告

事例 2 は話題の人物をゲストとして迎え入れ、彼・彼女らの生い立ちを尋ねたり、特技を披露してもらう『隠れ家 ARASHI』というコーナーからのものである。取り上げた回では、ソプラノ歌手の田中彩子（以下、田中）がゲスト出演していた。そこで彼女は「長年ヨーロッパに住んでいるため日本語が苦手」と紹介され、また、口調が普通よりおっとりしていたり、単語を思い出せなかったりするシーンが彼女と司会者である二宮和也（以下、二宮）との会話や、文字テロップなどによって強調されていた。事例 2 は田中が二宮に高音の訓練法を伝授するシーンである。

[事例 2]

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 01. ((ピアノの音)) | 07. 二宮 ((音を出す)) |
| 02. 二宮 ((音を出す)) | 08. 田中 あ:::>° すごい <((拍手しながら)) |
| 03. 田中 あ:::>((拍手しながら)) | 09. ((ピアノの音)) |
| 04. 二宮 出ます? = | 10. 二宮 ((音を出す)) |
| 05. 田中 =出ました出ました. 二つぐらい上がりました | 11. 田中 すごい高いでした |
| 06. ((ピアノの音)) | 12. 二宮 ¥高いでした¥ |

上記の断片で、二宮はピアノの音に合わせ、奏でられた音程の音を出し（02, 07, 10 行目）、そのたびに田中は反応し、二宮が指定された音を出せたことを報告する（05, 08 行目）。11 行目にある「高い」は、それらと同様に二宮が出した音の高さを指すことばとして理解できるが、田中は標準語としての文法から逸脱し、「高いでした」と発話した。それに対して二宮は笑ったような声で「¥高いでした¥」と繰り返すが、指摘や訂正の要求をしなかった。つまり、コーナーのこれまでの内容によって田中の逸脱性は強調され、そのため、交渉を行わなくても、逸脱を産出した瞬間から「笑えるもの」として受け入れられたのである。

3.3 非日本人出演者の場合：交渉と予告のいずれも行われぬ

[事例 3]



図 3 料理人の文字テロップ

事例 3 は「デスマッチ」と呼ばれる早押しクイズのコーナーにおいて、賞品の料理を紹介する VTR からである。事例 3 の直前では料理が中国特有の料理であること・日本ではなかなか食べられないことがナレーションによって説明されるが、その次に登場する話者の逸脱性に関する予告や、それを正当化するような説明はなかった。

ナレーションによる料理の説明に続き、中国人の料理人がカメラに向かって料理の紹介をするシーンに移った。その発話は同時にテロップによって視覚的に提示されるが、図 3 のように、語尾の「です」が「デシ」と表記され、全

体が直線的に配置されている中ではみ出すように配置された。また、文字テロップはいずれも、彼の音声的特徴を強調するように、発話のスピードに合わせて一文字ずつ出現する形になっている³。さらに、発話が産出されるとすぐに笑い声が入られ、スタッフや出演者との交渉を経るなどをした訂正のスペースを与えることがない。

4. 考察

以上分析の結果をまとめると、日本人出演者の場合、産出された言語的逸脱はスタジオにおける訂正に関する交渉、または「この状況なら間違えてもおかしくない」という文脈の説明によって正当化される。一方、非日本人出演者が逸脱を産出した場合はいずれも、交渉や説明が行われず、言語的逸脱は期待されているかのように、瞬時的に面白いものとして提示され、受け入れられることが一貫して観察される。

以上の分析から以下の考察が考えられる。日本人出演者の言語使用に対する評価は「通常なら逸脱しない程度の言語能力を有している」という言語イデオロギーによって支えられているため、産出された言語的逸脱は放送に不適切なものとして認識されている。しかし、逸脱の訂正に関する交渉まで放送することによって、「これは逸脱である」という制作者のスタンスが表明されると同時に、逸脱は「笑えるもの」として仕立てられ、再テキスト化 (Bauman & Briggs, 1990) される。また、交渉が行われない場合、一時的に作り上げられた「この状況・この話者なら逸脱があってもおかしくない」というコンテキストによって、逸脱は正当化される。それに対し、非日本人出演者が産出した言語的逸脱は予告されなくても、瞬時的に受け入れられ、交渉も行われない。そのことを支えているのは、非日本人話者に対する「完璧に日本語を操ることができない」という言語イデオロギーなのではないだろうか。

参考文献

- Bauman, R. and Briggs, C. L. (1990). Poetics and Performance as Critical Perspectives on Language and Social Life. In *Annual Review of Anthropology*, 19, pp59-88.
- Hambleton, A. (2011). Reinforcing Identities? Non-Japanese Residents, Television and Cultural Nationalism in Japan. In *Contemporary Japan*, 23(1), pp27-47.
- Kress, G., Jewitt, C., Ogborn, J. and Tsatsarelis, C. (2001). *Multimodal Teaching and Learning: The Rhetorics of The Science Classroom*. London: Continuum.
- McVeigh, B. J. (2004). *Nationalisms of Japan: Managing and Mystifying Identity*. Lanham, Maryland: Rowman and Littlefield.
- Nishizaka, A. (1995). The Interactive Constitution of Interculturality: How to be a Japanese with Words. In *Human Studies*, 18, pp301-326.
- Silverstein, M. (1979). Language Structure and Linguistic Ideology. In Clyne, P. R., Hanks, W. F. and Hofbauer, C. L. (Eds.) *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels*. Chicago: Chicago Linguistic Society, University of Chicago, pp193-247.

³ これとは対照的に、当番組では事例1を含め出演者の発話を反映したテロップは発話の最初の音と同時に、あるいは発話の直前に、すべて文字が一斉に出現するのが通常である。